JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	教育のイノベーションに関する一考察(7)“博士教育リーディングプログラムで身に付く力”
Author(s)	小粥，幹夫
Citation	年次学術大会講演要旨集，34: 581-582
Issue Date	2019-10-26
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16559
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

２Ｄ２４

教育のイノベーションに関する一考察（７）

“博士教育リーディングプログラムで身に付く力”

小粥　幹夫　　Mikio Ogai
mogai@mbn.nifty.com
（情報学研究所）

＜概要＞

イノベーションを牽引するグローバルなリーダー育成に向けて、博士教育リーディングプログラムが実施された。特定のプログラム履修や体験は質を保証するものでなく、育成する仕組みの持続的改善とともに育成される学生の質が高まることが重要である。履修した学生を対象とした「身に付く力」のアンケートの分析を中心に、育成される人材像や履修を通した改善について、全体、個別プログラムをフォローして分析、課題を明らかにするとともに、高校や社会とも接続した一貫した人材育成の在り方、教育政策への反映について考察する。

キーワード：人材育成　博士教育リーディング　俯瞰力　評価

１．まえがき

博士教育リーディングプログラムは、グローバルな視点を備え、イノベーションを牽引する高い俯瞰力を備えたリーダー人材育成を目指している。プログラムオフィサー（ＰＯ）の一人としてプログラムのお手伝いを行い、個人的には学会でのパネル討論を企画・実施して教育改革理念の定着や発展の方策を模索して来た[(1)]。ここでは、プログラムＨＰに公開された 24 年度事後評価結果[(2)]の「参加による能力変化について」の学生アンケート結果の表を読み取り、改善度に着目したグラフ表示により全体を把握、「身に付いた力」を分析、課題を明確にすることを試みたので紹介する。

２．評価内容と結果　＜結果の独自可視化＞

参加による能力変化の評価は 12 項目について、**事前に力を備えていた（◎）、ある程度あった（○）、なかった（X）**の 3 つの回答からの選択することを基本に、**履修開始後**の同様な選択を加えて比較することを基本としている。**図１**の実線は平成 24 年度採択で最終評価を迎えたプログラム**履修中の 1111 名学生**のデータ結果のまとめであり、これに**履修終了者 398 名**の同様のデータを点線で加えている。

この図では前と後の◎と◎＋○の４つのデータに着目、**前◎＋○**の大きな順に並べた。**後◎＋○は達成度**を示し、**前後差は改善度**を示す。

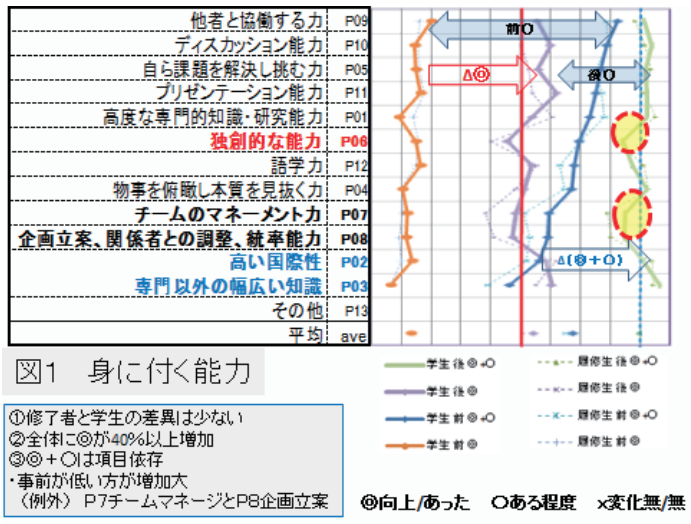

図1　身に付く能力

①修了者と学生の差異は少ない
②全体に◎が40%以上増加
③◎＋○は項目依存
・事前が低い方が増加大
（例外）P7チームマネージとP8企画立案

◎＋○の平均は、履修前の 67.6%から履修開始後には約 22%増して 90.1%となり、履修効果を表している。

３．身に付く能力の変化　　＜◎＋○の前後差に着目＞

図１に対して、履修前後での◎+○の差の大きなものから順番に並べたものが**図２Ａ**である。この図では身に付く力の内容説明をキーワードに簡略化しているが、項目番号は同一である。

10～20%の前◎は 50%を超える後◎に改善されている。前◎＋○と前◎の差である**前○**であり、**40%から 70%に及ぶ。**

プログラム内容のデザインに当たって、履修生の履修前の力を把握することは重要である。○評価の学生を主対象に内容を決めると、Ｘの 10～20%の学生には高度となりすぎる場合もありそうである。逆にＸを意識しすぎると、○の学生には物足りず、◎への改善がおきない可能性もある。**効果的な改善には前○、前◎の割合を知っておく**ことが重要である。

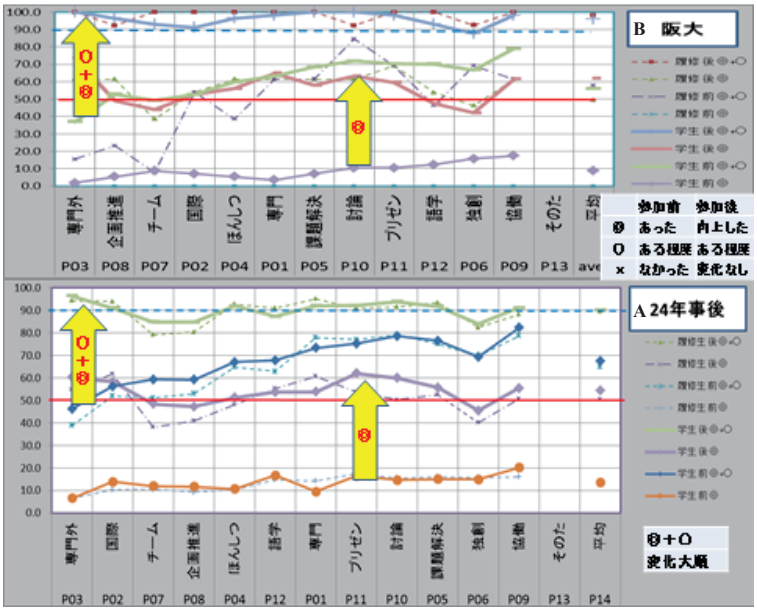

図２　◎＋○の前後差の大きい順の図

４．個別大学の分析

図２Ｂは筆者が P0 を務めた阪大情報系のプログラムに参加している学生のアンケート結果で図２Ａと同様に履修開始前後での◎＋○評価の差の大きな順に並べたものである。履修後のＸはほとんどの項目で 10%以下とバランスの取れた優れた結果となっている。

５．あとがき

アンケートの結果はプロフラムの内容を反映したものであり、改善に繋げるとともに、社会、特に企業と共有して身に付ける力の内容やレベルについて意識合わせを行う必要がある。分野毎にこれらの要求は異なり、個別の調査分析も必要と考える。また各大学独自のカリキュラムとの関係を含めた評価分析も行われている中で、プログラム全体としてのアンケート調査の在り方を明確にした改善が望まれる。

参考）

１）2018 年本大会 2H23　「教育のイノベーションに関する一考察(6)　“博士人材の育成と同窓会の役割”」

２）博士教育リーディングプログラム　事後評価結果　平成 24 年度採択プログラム

平成 24 年度採択プログラム事後評価アンケート調査結果　調査結果報告(PDF)

https://www.jsps.go.jp/j-hakasekatei/data/jigo_hyoka/h24/H30jigo_questionaire.pdf